

2026 年 7 月 29 日
日本銀行決済機構局

CBDCフォーラム DG1
「CBDCアーキテクチャーに関するディスカッショングループ」
第1回会合の議事概要

1. 開催要領

(日時) 2026 年 6 月 24 日 (水) 14 時 00 分～16 時 00 分

(形式) 対面形式およびWeb会議形式

2. プレゼンテーション

- 事務局から、冒頭説明として新しいディスカッショングループ（以下、DG）の位置付けや今後の各DGの進め方について説明¹した。
- その後、CBDCのアーキテクチャーに関するシステム・実務面に関して、これまでの「実験用システムの構築と検証」の概要や、過去のCBDCフォーラムにおける各ワーキンググループでの議論内容等について説明²した。
- また、同制度面に関して、財務省理財局から、「CBDCに関する関係府省庁・日本銀行連絡会議」および同幹事会での議論について説明したのち、事務局から、DG1で取り扱う制度上の論点イメージについて説明³した。

3. 主な質疑応答

(参加者)

- ・ CBDC、ステーブルコイン、トークン化預金といったデジタルマネーは、それぞれに強み弱みがあり、互いに共存・補完関係にあるべきと理解している。一方で、バランスを取りながら検討を進めていくと、特定のデジタルマネーにフォーカスして検討を進めているような法域対比では、対応が遅れる可能性も意識する必要がある。この点、日本として、優先順位も含めてどのようなアプローチで取り組んでいくかは重要な論点。私個人としては、円の

¹ https://www.boj.or.jp/paym/digital/d_forum/dg1/dfodg260729c.pdf 参照

² https://www.boj.or.jp/paym/digital/d_forum/dg1/dfodg260729b.pdf 参照

³ https://www.boj.or.jp/paym/digital/d_forum/dg1/dfodg260729a.pdf 参照

国際的なプレゼンスの先行きについて問題意識を持っている。

(プレゼンター)

- ・ 決済の領域も様々であり、整理して考える必要がある。例えば大口決済⇔小口決済の軸と、国内⇔クロスボーダーの軸との組み合わせで、四象限が考えられる。ご指摘の点は主に大口×クロスボーダーが対象になると思うが、この分野では例えばB I S（国際決済銀行）とI I F（国際金融協会）が主導するプロジェクト・アゴラ⁴といった取り組みが進んでいる。その他、国内×小口ではC B D C、国内×大口では、日銀ネットや全銀ネット等が対応している。いずれにせよ、標準化やルールメイキングも含めて各領域での取り組みを着実に進めることで、全体として決済の利便性を向上させていくことが重要だろう。
- ・ また、国内の小口の決済については、地方において、現金流通を支えてきた地域の金融機関が経営合理化等を進めるもと、どのように将来像を描いていくか考えないといけない。

(参加者)

- ・ デジタル地域通貨のプロジェクトを行った際には、山間部などの電波が届かないところでは使えないといった課題があった。C B D Cが現金と同様の役割や機能を果たすのであれば、こういった課題への対処が必要であろう。例えば、民間への補助を通じた環境整備といった発想もあるのではないかな。また、インフラという観点からは、鉄道・通信などのように、サービス提供は民間に委ねるという考え方も有り得るかもしれない。いずれにせよ、C B D Cの位置付け等は今後とも検討していく必要がある。

(プレゼンター)

- ・ 現金は、デバイスや電気・電波がなくても決済できる特徴がある反面、現金を輸送するロジスティクスなどの負荷が伴う。求められる決済体験に関するコンセンサスを踏まえながら、人口減少社会における決済体験をどのようにデザインするかという議論が必要であり、その中で、民間との協働の観点も含めて様々な選択肢を検討していくことになるのではないかな。
- ・ C B D Cに関する検討は、現金というフィジカルなマネー、民間のデジタルマネー、公的なデジタルマネーという三者の役割分担をどのようにデザインしていくかに関する議論を踏まえて進めることが重要だろう。

以 上

⁴ https://www.boj.or.jp/paym/intlact_pm/bisih/index.htm 参照